

釧路湿原自然再生協議会再生普及小委員会

環境教育ワーキンググループ(第6回)

議事要旨

平成 22 年 2 月 18 日(木) 14:00~15:30

釧路地方合同庁舎 5 階 共用第 1 会議室

【出席者(敬称略)】

環境教育ワーキンググループ構成メンバー

<個人(所属)>

- ・ 大森享(北海道教育大学釧路校 准教授)
- ・ 神戸忠勝
- ・ 小松繁樹
- ・ 新庄久志(釧路国際ウェットランドセンター主任技術員、環境ファシリテーター)
- ・ 高橋忠一
- ・ 松本文雄

<団体(出席者)>

- ・ 釧路湿原国立公園ボランティアレンジャーの会(鈴木久枝)
- ・ 釧路市民活動センターわっと(成ヶ澤茂)
- ・ こどもエコクラブくしろ(近藤一燈美)
- ・ NPO 法人 環境把握推進ネットワーク - PEG - (照井滋晴)

<教育行政関係機関(出席者)>

- ・ 北海道教育庁釧路教育局社会教育指導班(柴山敬)
- ・ 釧路市教育委員会指導主事室(渡邊直子)

<関係行政機関(出席者)>

- ・ 環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所(出江俊夫)
- ・ 国土交通省北海道開発局釧路開発建設部治水課(法村賢一)
- ・ 林野庁北海道森林管理局釧路湿原森林環境保全ふれあいセンター(朝倉基博)
- ・ 釧路市《釧路国際ウェットランドセンター、釧路湿原国立公園連絡協議会》
(福田芳弘)

環境教育ワーキンググループ事務局

- ・ 環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所(伊藤俊之、露木歩美)
- ・ 財団法人北海道環境財団(久保田学、山本泰志、内田しのぶ)

【議事概要】

事務局 第6回環境教育ワーキンググループ(以下「環境教育WGと表記」)を開催する。本日より新しく委員に参加した小松委員より参加理由も含めて一言いただきたい。

小松委員 釧路湿原の素晴らしさを多くの人に伝えるために、個人として何が出来るかを考え、あくまで個人として参加させていただいた。釧路湿原の保全のため、今後活動していきたいと考えている。よろしく願いしたい。

事務局 資料の確認をしたい。(配布資料の確認)

議事1 今年度の環境教育ワーキンググループの活動報告

事務局 進行を高橋座長にお願いする。

(以下、高橋座長による進行)

高橋座長 本日の最初の議題として、今年度の環境教育WGの活動状況をまとめて報告する。事務局より資料1の説明を求める。

事務局 今年度の環境教育WGの活動内容について、資料1より報告する。(資料1に沿って説明)

研修のねらい等が参考資料の1-11に記載している。参考までにご覧いただきたい。

高橋座長 今年度の環境教育WGの活動に関して報告いただいた。ただ今、報告のあったことについて、さらに説明が必要なことや質問などあればいただきたい。新しく参加された委員もいるため、共通理解のために、これまでの経緯について簡単に説明する。以前に学校の先生を中心にした環境教育WGに相当する集まりがあり、釧路湿原の環境教育についての教材づくりを行った。これらの事業が終了後、一度解散し、新たに作り直したという経緯がある。これまで、学校の教員を中心に委員に参加いただいていたが、その枠を外して委員を再構成することとなった。社会教育も含めた形で環境教育について考えるべきだが、まずは学校教育をターゲットとした活動を開始することとなった。釧路湿原を題材とした実践活動についての調査を行い、それらの実践情報をまとめた事例集を作成した。この事例集をいかに活用するかが我々の次のテーマになっている。これらの背景について少し話をいただきたい。実践してみたいという声はいただいているが、実際には学校における実践が増えているわけではないという状況もあり、打開策の一つとして、教員を対象とした研修を昨年7月に実施した。実施してみてどうであったか。

新庄委員 新採用の教員もおられたので、初めて湿原に入った方、フィールドに入るとは久しぶりだという意見があり、こういった機会が多くあれば良いという声をもらった。小出しで良いので、様々な場所でサテライト的に実施できれば良いのではないかと感じた。

座長 年2回くらいは実施するという話もあるが、もう少し多い方が良いのか。

新庄委員 学校の事情もあり、昼間フィールドに出るのは大変だと聞いている。休日など、教員が自主研修の中でセットできると参加しやすいという意見もあった。

座長 研修に参加した教員からのアンケートを見ると、釧路湿原をテーマとする環境教育といってもかなり広い観点があるが、可能性としてはどのような印象をお持ちか。

大森委員 実践の数としてはあまり増えていないという報告であったが、教員との話などを通して、地域を教材に活用する、生活と教育の結合、生活と地域を結び付けた学習などといった重要な視点は広がりつつあると感じている。具体的に釧路湿原に関わる実践数の増加は見られないが、生活や地域を教材化する、子どもが実際に生活し生きている地域を結び付けた学力を形成するという環境教育にとって身近で具体的な地域から学び最終的には地球環境問題を考えられる子ども、具体的に地域で活動できる実践的な力を持った子どもを育てる。その上で重要な視点は広がりつつあると思う。現象面では増えていないが、どのように考えて環境教育を進めていくのか、釧路湿原に関わらずとも教科の中で活かされていくと考えており、ジャブのようなもの。小出しに継続して行うことで徐々に効果が出てくるのではないか。そうした印象を受けている。

出江委員 昨年7月に環境教育推進室より赴任した。前職の時に事例集を拝見し、非常に素晴らしいものが出来たと感じていた。様々な切り口から湿原を捉えて実践しているということや、実践する学年も幅を持っており、湿原を通じて街づくり等、様々な視点を持ちつつ内在化させてテーマを設定されていることが非常に素晴らしいと感じる。こういった事は継続していくことに意味があり、お話いただいている事はその通りだと感じる。この後の議論になるが、前職の時に、本日添付資料として配布している資料『パンフレット「授業に活かす環境教育」』等の作成に携わっていた。どのようにすれば環境教育が学校の中で取り上げていただけるか教員と話をすると、非常に多忙であり現在の教育活動に個別に上乘せで何かを行うということ、環境教育だけでなくキャリア教育や食育など様々なものが乗ってくる中で、どのようにすれば学校の中で取り組んでもらえるかという話があった。学校では、学習指導要領に沿って、年間計画、学年計画を立て進んでいくので、学習指導要領をしっかり踏まえ、環境教育と各教科との関連性を理解し、わかりやすく提供することで、各教員が日常的に行っている学校の取り組みの中で上手く実施することが出来れば、もっと広がるのではないかと指摘を頂いた。こうした視点から、文部科学省と協力をして新学習指導要領の中にどのように環境教育とつながる記載があるかを引き出し、いくつかのテーマごとに整理したものが添付資料となっている。キーワードとして書いてあるが、全て学習指導要領に記載されていることを簡略化して書いており、指導要領の中身となっている。学習指導要領の記載の中には、思いのほか環境教育につながる部分が多く入っているといことが整理してみて改めて感

じた。学べるところは本資料も参考にしながら、出来ることは小さくても良いので一歩ずつでも進められればと考えている。

座長 これまでの意見の中で、重要なキーワードがいくつか挙げられた。地域を教材とする方向性や考え方が、学校教育の中に少しずつ取り込まれつつあるかもしれないという認識。小出しにしていく。何らかの形で継続していくことで活動が開けるかもしれないといったご指摘であった。地域を教材とするという方向性について、教育局としては？

柴山委員 総合の時間が減少する傾向にあり、どのように教科内に散りばめながら実践していくかという意見であったが、自分は社会教育を担当しており、学校教育以外の部署にいる。社会教育という分野で仕事をしていて感じるのは、教科にばらすという感覚はない。何のために湿原のプログラムをおろしていくのかということを見ると、教科のプログラムとして取り組んでいくことはもちろん、例え話やちょっとした授業の中身に付け加えて教員から話が出来ることが重要だと感じる。教員研修の話があったが、自分は事業を組む時、参加者が何かしらの感動を得ることを意識して企画している。気持ちが揺さぶられる瞬間を作りたいと思っている。フィールドに出れば感激したり、なるほどと思うことがあろう。プログラムとしておとせなくとも、様々な場面で話されることがあれば、湿原をより身近なところから大事にしていこうという意識を育む部分もあるのではないかと感じる。教員が生徒に感動を伝えるようなことがあっても良いのではないかと感じる。

座長 次の議題に関係する意見が出てきたので、皆さんより意見をいただきたい。地域性の問題と教員の忙しさの話題が挙がっていた。釧路湿原をテーマとする際の準備の煩雑さ、忙しさが増えるという危惧が教員にあるのではと感じる。教員の忙しさ、ゆとり等の面から、取り組みのネックになっていることがあるのか。

渡邊委員 教員は忙しいとは思いますが、少し気のきいた教員であれば、例えば小学校であれば、全ての教科について何か教材化できないかと常に考えている。例えば、釧路では田んぼがなく、旅行などで田んぼをみると、写真を撮り、授業で使えるなど、アンテナを立てている。教員が経験したことによって、これは、授業に活かせるのではないかと、子ども達に伝えようという気持ちにはなるであろう。研究センターと共催研修をで行ったが、良い機会をいただいた。また、別の機会に若い教員は土いじりが嫌いということで、生活科の授業が嫌だという教員が多いという話を聞いた。教員が嫌いだと、子ども達も機会が得られない。そうした体験が出来る教員をつくっていくには、少しずつ浸透させていく、教員自身を育てていくという視点も重要ではないかと感じる。

座長 忙しい場合、優先順位が出てくる。地域を教材にするという視点からすると、順位があがってくるのではないかと感じるし、あげるべきではないだろうか。学校外での児童とつきあっている立場から、いかがか。

近藤委員 小学校3年生から高校2年生の8名で活動を行っている。子ども達は様々なものに興味を持ち、自分から進んで活動を行っている。他の団体に協力いただきながら学習しているが、子ども達から教えられることも多くある。学校で少しでも話をしてもらって、友達に広げてくれたらと思う。

座長 学校がいかに地域と協力するか、地域の中でいかに学校をサポートする芽が育つかということが重要である。

成ヶ澤委員 学校では、発達段階・学年で大まかな方向性が決まっているから変えることが難しいということであるが、学年ごとということか。

事務局 学校ごとに違うと思うが、一つのことではなく、様々なことにテーマを置いて取り組んでいる。言葉や文化、自然環境を知るなど、様々なものがある。大きな枠が決まり、その中でそれぞれ工夫をしていくということになる。釧路湿原を題材として活かしにくい学校でテーマとして取り入れてもらうことが難しいこともある。

成ヶ澤委員 富良野に行く機会があり、その地域では学校により低学年、中学年、高学年でカリキュラムが決まっている。教員が変わっても学校単位で行っており、地域に関する様々なものをテーマとして扱い実践している学校は多くある。湿原再生でこういったカリキュラムがあると学校に提案して、受けることも可能ではないか。森林ふれあいセンターでも活動している。先生をサブにして、我々が表に出てカリキュラム的なものを作っていければ一番良いのではと思っている。子ども魚博士という事業を行っているが、魚をテーマに30名の児童を様々な場所に連れて行き体験をもらった。教員も驚くほど子ども達は勉強している。市内の学校には温度差があり、学校全体でそういったカリキュラムを作ってもらえれば、湿原だけでなく、郷土教育として良いものができるのではないかと感じる。

座長 総合的な学習をどのように進めたら良いかといった教員の戸惑いもあり、いくつかのガイドラインが出来た。36ほどのテーマがあり、その中から選んだものが今でも続いているという経緯もあるのではないか。これまで続けて安定的にやってきたことを新しく変えなくてはいけないということが手間なのではないか。本日も学校を支援し活動している方もおり、後々ご意見もいただきながら、打開策などについて議論していきたい。次の議題に進めたい。

議事 2 環境教育ワーキンググループのこれからの活動について

高橋座長 事務局より資料2の説明を求める。

事務局 資料2 - 1、2 - 2について説明する。(添付資料も示しながら説明)

座長 重要なプランが提案されたが、今回のワーキンググループではこれを決めるといふことか。

事務局 教員等の意見も踏まえながら今後の方向性ということで提案させていただいたが、委員の皆さんより本日はご意見をいただきたい。

座長 本日は皆さんからいただいた意見を参考に再度検討していくといふことである。感想で結構なので、委員より意見をもらいたい。マトリクスに相当する形の釧路湿原版ということであったが、作成に携わった立場から追加の説明をお願いしたい。

出江委員 文部科学省の教育指導課の協力を得て、専門家、教員の方達にも入っていた意見をいただきながらまとめたもの。企業やNPOの活動が活発であるが、そうした活動が学校に浸透していかないといふことを一つの悩みとして持っていた。社会教育や子ども、家庭での環境教育を切り口として活動していたが、それらには垣根はなく、本来は学校、地域、社会教育が一体となって進むのが理想的な形であろうということとなった。どのように有限な資源の中で効果的に進められるかといった整理がなされて、学校教育の中で受け入れやすいような形で様々なことを提案されるとやっていきやすいという指摘があった。さらに言うならば、学校教育が主体的に取り組んでいくということ再認識していただきながら、外側から協力していくということが良いであろうということであった。学校教育法の改定の時期であり、環境教育の基本的な考え方が新たに盛り込まれるという状況にあったため、一緒になって何か考えられないかということで、結果としてこういったものが出来た。環境教育を学校でやるというよりは、授業の中で環境教育の切り口をどのように活かすのかというようにご説明した方が、学校で受け入れてもらいやすいというご助言をいただき、標題もこのようにしたという経緯がある。学校のシステムを意識しており、それぞれの中で教員は工夫されながら授業を行っており、その中で計画を立てる際に本資料などを参考にしてもらいながら上手く使ってもらえと実際に進んでいくのではないかといった意見もいただいた。教科にばらすという意味ではなく、教科どうしをつなげながら、また、総合的な学習につなげていくという、有機的につないでいくということねらいとした要素として分類・整理を試みたということである。低学年で学んだことが、次学年でどのように発展させていけるかといった、つながりも整理できるのではないかということもあった。総合的な学習に関しては豊富な実践が行われている地域であるので、それは活かしていただく前提として、それを広げていく裾野の議論として、こうしたものも一つの展開の仕方としてあるのではと考えている。

座長 教科のどれかにあてはめるというよりは、学校の子供達の生活の中で、何らか

の形でこういった発想や認識が得られるような、学校教育の中にそれとなく入っていくといったことを考えた方が良いのかもしれない。こうしたマトリクスを作ってみるという案が出ているが、専門的な立場から意見をいただきたい。

大森委員 目指すべき人間像や社会の定義が書いてあるが、個別に検討すると同時にこれを通じてどんな子どもを育てるのか、どんな社会をつくる子どもを育てるのかを検討することが重要である。パンフレット中に平成 16 年、平成 19 年の定義があるが、これが重要な検討課題になるであろう。全体的にみて感じたのは、イギリスは 2001 年にシチズンシップ教育、市民性教育というものを中学校で義務化した。国家、社会を作る人材をどう育てるのかということで、当時のブレア首相がレポートを依頼した。地域の論争的な課題を授業に取り入れ、地域の問題を考えさせるような授業をすべきだということで中学校において義務化した。イギリスの中学校の実践事例では、公園を子ども達が使いやすいように、関係諸機関、役所などと相談しながら公園を変えていくなど、具体的に地域の環境を変える原体験をする。知識だけではなく、どうやって地域を変えるのかといった実践力を育てることが環境教育では非常に重要となる。ここでは、合意形成や意見表明ということが書いてあるが具体的にそういった場をどうやって設けるかということが非常に重要な課題であり日本ではこうした課題解決が遅れているのではないかというのが自分の問題意識としてある。マトリクスで整理することに異論はないが、日本の環境教育に欠けているのは、いかに実際の現実的な実践力をつけるということであり、そこが弱い。埼玉県鶴ヶ島市の教育委員会が「子どもは小さなまちづくり人」として、実際に公園を改修したり学校の校舎を建て替える際に様々な意見を取り入れるなどの取り組みがあったが、そういった問題が日本の環境教育にはあると考えている。

座長 教員をされていた時、授業や学校行事で実践を行うことは大変であったか。

大森委員 東京で小学校の教員をしていた時は、様々な実践を行ってきた。当時建設省の方と連携して地域にトンボ池を掘る、区役所の公園緑地課の方と相談しながら実際に公園を変えていく等様々な実践を行った。子ども達が意見表明して合意形成していく口論の場が日本にはなく、非常に問題であると考えている。マトリクスはやるべきだし重要であるが、このままやると抜け落ちることがあるのではないかとこの問題意識がある。

座長 そうしたことも上手く意識していける。

近藤委員 教科学習について、あまり大きく広げるのではなく、小学校 3、4 年生では地域の学習として郷土の学習を行っている。その中で、どこで、どのように当てはめていけるかを考え、そういったことから手をつけていった方が良いのではないか。釧路では、現在、釧路湿原の資料として学校に配布している本はない。かつて国立公園に指定された際に、釧路湿原という冊子を作り配布したが現在は配られていない。そうした中で、情報を入れていく、協力が可能な情報を記載するといった、情

報を積み重ねることで学校に入っていきやすいのではないかと感じている。

座長 学校図書館については、釧路市は書籍を買う予算は決して多くはない。本来図書館協議会などが各学校に何冊くらいあれば良い、という指針を出しているが、はるかにおよんでいない。また、釧路の学校らしい本があまりない。例えば釧路湿原のことを調べ学習しようとして図書館にいったも、資料が少ないというのが現状である。予算の問題もあるかと思うが、工夫して連携できないであろうか。

近藤委員 調べてみると、環境教育に関しては釧路の本を使って様々なことが出来るようにはなっている。

新庄委員 事務局より提案が挙げられたが、情報収集と提供について今年度足りなかった点について意見を申し上げたい。浜中町でワークショップをした際に教員から相談を受けることがあったが、教員はどうやって教材化したらよいかを困っている。霧多布湿原の仕組み、食物連鎖、地球環境にどう霧多布湿原が貢献しているか等を教えなくてはならない、実際に湿原に連れていけないといった悩みを持っており、視野が非常に狭くなっている。話を聞いてみて自分が助言したことは、教員がやっている授業の情報を収集すること。今のまま、それで良いということが多くあった。実践していても湿原と関係していると思っていない。現在何をやっているのかを把握し、それに何をプラスアルファするか考えることで生きてくるのではないか。副読本の話があったが、湿原に限らず、全国で副読本になっている地域をテーマとする教材がどんなものがあるか収集したらよい。釧路湿原を題材とした英語教材もある。その教材では、一方がお客の役となり、一方がガイド役となり、英語でガイドを行うという。地元の自然や地域を紹介している副読本は多くあり、これらを集めて参考にすれば良い。これで良いのであれば出来るということも多く出てくるであろう。マトリクスは大森委員の意見をいただきながらトライアルとしてユニークな釧路版を作ればよい。新指導要領と提携する道筋を探すということが本ワーキンググループの仕事でもあり、このようにすれば提携できるということをマトリクスで出来るのではないか。研修については、教員を集めるのは非常に大変であり、教育研究センターと共催して実施した形では、ごく一部しか集まることができない。講師を選んで逆に学校に出向き、学校近隣の湿原で出前の教員研修を行うトライアルを行えばよい。最初から大規模で実施することを考えず1、2回やってみて、ノウハウや情報を積み重ねていけば良い。事務局から提案された1、2、3の各項目について、平成22年度の環境教育WGの活動として出来るものを盛り込んで、平成22年度の取り組みの提案に構築すれば良いのではないか。

神戸委員 年度に関わらず、4番目の活動を考えてみたい。研修を主体にして、最終的に教員だけの組織づくりをしてはどうか。教員の部会をつくれれば、横のつながりも出来、学校で出来ることにも幅が出てくる。ずっと続くワーキンググループではないので、そういった教員の部会づくりを目指すことを提案したい。

座長 自然体験の集まりなど、現在でもそうした組織はあるようである。

新庄委員 この仕事は永遠に続けてほしいと思っている。ネットワークが必要であり、各学校が実践していることをすくい上げ、共有する場がない。個々に実施しており交流がない。交流をさせるのが我々の仕事。情報を収集し、紹介し、ネットワークの運営を行うべき。こういった仕事が目指すべきものとして4番目に必要ではないかと考えている。

座長 目指すべきものとして、学校という単位を超えろという提案であった。企業や施設などが、学校の教育活動に何らかの形で参画する、手助けするという事例を様々ところで散発的には聞く。学校から相談された時に支援することはできないものか。例えば、児童が活動する時に、軍手や小さなシャベルを提供するなどの企業の参画もあると聞いたが、感覚的に現実には可能であるか。

小松委員 相談いただければ検討していいのではないか。

座長 社会教育施設で独自の活動をされたり、子ども達を受け入れている活動をされている方に話を伺いたい。学校から依頼を受けたら出前授業を行う、施設に訪問があれば対応・支援するという事は聞くが、学校教育の場と施設の間で、もう少しおせっかい的な働きかけはできないのか。流動的な交流が構築しにくいという印象がある。学校の教員を入れておせっかいなことはできるのか。

朝倉委員 今年度、学校の教員を対象に研修の募集を行った。一組申し込みがあったが、直前に参加できなくなったと連絡があり、実質出来なくなった。平成20年度は3組、家族を含めて実施し、雷別の自然再生現場で講座を行った。小学校が主体でやってきているが、概ね我々が使っている教材は、マトリクスに沿った形でやってきているのではないかと感じた。支援内容や実績などを広報誌でPRしてきているが、実際には、学校からの相談から始まる事がほとんどである。

座長 もう少しつっこんだら可能性があるかもしれない。

福田委員 今までの話を伺ってきて気がついたこととして、これから環境の話をしましよと言っても誰も来ないのではないかということ。これらは生き方の問題で、最終的には日常にならなくてはいけない。教員のための勉強の時間、子どものための勉強の時間と、時間をとろうとすると強い抵抗があるのではないか。実際、教員も子どももすごく忙しい。この教科のここにこうして取り組むということを考えずに、学校教育に関して言えば、学校に携わっている全ての人、保護者、教員、地域の人に何となく意識してもらえれば日頃の行動、言動にも出てくる。生き方の教育の話になってくる。こういう場で話をしていると、理論や理念は大切だが、実践力になげろ話が置きざりになることが心配である。ウェットランドセンターというより、環境政策課の業務として、教員や子ども達とよく話をする機会があるが、湿原のことを知りたい、どんな教材を使えば良いのか、湿原について教えてほしいと言われる。自分は湿原そのものの解説は一切してしない。湿原があることによって、この

地域がどのように救われているのかといった話をしている。台所の水が環境にどのように影響するかという話をしている。こうしたことの積み重ねでしかないと考えている。時間をとって、こうしましょうという時間をいかに避けるか、日常の中で子ども達と教員がそうした話が出来た環境、学校の中でそうした環境をいかに作るかということが非常に重要だと考えている。実践力や生きていく力について、地域や学校でも過去何十年間と意識しないで来ている。そうしたことも職場で感じる機会もあり、非常に悩んでいるところでもある。

鈴木委員 教員を教育するのは大賛成である。教員は常に異動し、ごく一部がこの釧路湿原にいるため、何回も教育してほしい。協力もしたい。AED と救急法を教えに高校、大学に行っている。各学年の子が2クラスずつ来ていたり、教育大等では専攻の人が来たりしている。出前授業でやったらどうかと思っており、この場でもそうした話題が出ていたので賛成だ。教員に対しても、子ども達に対しても、バス代を出して児童が湿原に来ることが出来ないのであれば、私たちが行けば良い。

松本委員 環境教育と捉えれば、身近なことから始まるが、一番難しいのがこの場合は釧路湿原に関する環境教育がテーマとなっている。釧路湿原は基本的には全く身近な場所ではないが、それをいかに身近に感じてもらうかということであり、始めからいびつな目的を設定しているところが難しいところではないか。博物館で学校との関係はあるが、かなり距離も感じている。学校の方は自分も詳しくはないが、例えば、鶴居で行われているタンチョウのえさづくりプロジェクトなどの実践の場などを見ていると、小さい学校では、学校の教員と地域住民とがほぼ一体となっており、やりやすい部分もある。しかし釧路などでは、簡単にはいかない。なぜ簡単にいかないのか自分にはまだわからないが、その答えがわかれば、これからどうしていけば良いかが検討していけるのではないか。自分も勉強不足なのでわからない部分もあるので、教育局の方に発言していただいたり、実際の教員からの意見を集めたい。

座長 今やっていることで良いという話題が出たが、やらなければいけないということではなく、今やっていることを前提とすれば良いのかもしれない。そこから道筋をたどっていくのが現実的ではないか。

新庄委員 現場に良く我々は行った方が良い。現場ですでにやっているが本人達が気付いていないことも多い。それが湿原とつながる、ということに気づいてもらうということ、それらをつないでいく、ネットワークを作っていくことが、ワーキンググループの仕事であろう。

成ヶ澤委員 子ども魚博士の事業を行った際に、塘路湖で地引網をし、大きなアメマスがとれた。子ども達が学校で教員に報告しても反応がないという。教員達がアメマスを知らない。子ども達に魚博士の名刺をつくり校長と担任教員に渡し学習内容を知らせなさいと伝えたが、保護者は喜んでいるが、教員達から反応がないという。

常にアンテナをつけるという教員が沢山いてくれれば、釧路はもっと良くなるのではないか。

座長 NPO としても、地域や学校教育と関わりあうのは重要なことと思うが、距離を縮めるための努力というものはあるか。

照井委員 考えがまとまっていないが、自分達のような団体が実際にどういうことが出来るのか考えていた。今までやってきた学習会など、地道にやっていくのが一番重要かと思う。現場の教員、学校全体の意向を団体等が理解したうえで、環境教育のイベント等を組むことが出来れば、子ども達も学校に還元でき、教員達に気づいてもらえれば、もっと良い共生関係が出来るのではないかと感じた。これからは自分達も考え意識して取り組んでいきたい。

座長 来年度の3つの事業についての意見と、4つめとして、少し遠い先の目標としての提案もあった。情報収集については、これまで進めてきたことを継続して進める。釧路版マトリクスを大森委員のアドバイスも入れてより釧路らしいユニークな形で作ってみる。教員研修は、学校への出前研修、小出しに企画していくといったことも検討していきながら、来年度は2回やってみる。その際にも教員が集まりやすいような状況を考えていくことも重要ということであった。最終的には教員が自分達で自立して動き出すような組織を育てるということ、学校という一つの単位を超え、学校同士が協力しあうような何らかの組織作りが出来れば良いということであった。そのためにワーキンググループから問いかけられることも検討していきたい。来年度はこうした形で進めていくということでもよろしいか。具体的な形については事務局と打ち合わせしながら、協力いただける方を増やししながら進めていきたい。また、現場の意見を話していただける教員に入っただけことや、委員として参加しないまでも、オブザーバーとしてその時来ていただくといいことも考えていければと思う。この集まりでは、参加いただいた委員からざっくばらんに意見をいただいていく場としたいので、今後ともよろしく願いしたい。これで議題の2を終了としたい。その他として情報提供等あるか。

事務局 環境教育 WG から離れ、行動計画ワーキンググループからのお知らせをさせていただきたい。第2期行動計画が完成し、それに基づいてワンダグリーンプロジェクトのチラシを配布させていただいた。将来的には学校の取り組み等も多く入ってくればと思う。様々な取り組みをお待ちしている。今回はチラシの形式を変えて冊子状にしており、在庫も多くある。サポーター、募集者、施設などで配布を検討している。協力をお願いしたい。

座長 本日の WG をこれで終了としたい。事務局にお返りする。

事務局 皆さんの意見を基にご提案させていただきたい。以上をもって第6回の環境教育 WG を終了とする。

以上